



Title	植民地時代チリにおける先住民装束の変容(1) : 「マクン」と「イクージャ」
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 2007, 32, p. 93-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97984
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

植民地時代チリにおける先住民装束の変容(1)

―「マクン」と「イクージャ」―

千 葉 泉

序

本稿では、植民地時代の初中期にあたる16世紀半ばから17世紀にかけての時期に、チリの先住民民族マプーチェの装束の分野で発生した変容を論じる。

マプーチェは、南米大陸の南端、太平洋岸に面して南北に細長く伸びた国チリに住む先住民民族である。16世紀の半ばにスペイン人征服者たちが到来したとき、今日のチリ中南部に居住していたマプーチェは、労働賦役や集住を強いる異民族の支配を嫌い、恒常的な抵抗を展開した。こうして17世紀の初頭に事実上の独立を回復した彼らは、それ以後、19世紀の後半にチリ政府が決行した「平定」という軍事行動によって敗北し、狭小な「共同体」に居住することを余儀なくされるまで、長期にわたって自立的性格の強い民族テリトリーを維持することに成功した。

ところで、「平定」以前の時期においても、マプーチェは対峙する植民地社会やチリ社会との関係を完全に拒絶したわけではなく、これと多岐にわたる関係を結びつつ、物質的・精神的生活の両面において様々な影響を受け、その結果、彼らの社会は大きな変容を経験した¹。着衣の分野も例外ではなく、この時期、彼らの装束の形態、素材、色彩、ジェンダー的差異、象徴的価値等、様々な側面で大きな変化が生じた。

しかしながら、歴史学や文化人類学の立場から行われてきた従来の研究の中で、植民地時代におけるマプーチェの装束とその変容に関して、動態的な視点から実証的な検討が十分に行われてきたとはいえない。以下、従来の研究のなかで、マプーチェの装束の問題がどのように論じられてきたのかを検討しておこう。

1. 従来の研究の批判的検討

まず、マプーチェ文化を総体的に扱った研究を見てみよう。

歴史家で文化人類学者でもあるトマス・ゲバラは、先スペイン期のチリの歴史に関する研究の中で、先住民の着衣にも言及し、主に文様の観点から、中央アンデス地域の諸文明からの影響について論じている²。ただ、研究の性格上、征服期以前の時期におけるアンデス諸文明からの文様の借用の問題は扱っているものの、スペイン人到来以降の装束の変化は論じていない。

また、歴史家ホセ・トリビオ・メディーナも、チリの先住民の民俗に関する研究の中で、先スペイン期の先住民装束を取り上げ、征服期（16世紀中葉）から17世紀に書かれた記録に依拠してこれを論じているが、やはり征服以降の変容には言及していない³。

一方、文化人類学者のオラシオ・サパテルは、チリの先住民全般の歴史と文化に関する資料研究の中で、マプーチェの装束に関する項目も設けている。その中でサパテルは、貫頭衣「ボンチョ」について、スペイン人到来後、一世紀以上経過した17世紀の後半に執筆されたロサレス神父の記録に依拠して、これが先スペイン期から存在した伝統的な装束品である旨を主張している⁴。換言すれば、征服後の一世紀間、マプーチェの装束が不変であったことを前提として論じているのである。後述するように、「貫頭衣」の問題も含め、こうした静態的な視点は、実態から大きく乖離している。

以上見たように、先住民の文化全般を扱った研究では、先スペイン期の装束に重点が置かれ、植民地期における変容に関する動態的な視点は欠如している。また、先スペイン期の装束についても、後代の資料を無批判的に利用するという問題点が観察される。

次に、検討の対象をマプーチェの装束に限定した、より具体的な性格の研究を検討してみよう。

まず、コンセプシオン大学の研究チームが1973年に発表した、マプーチェの毛織物に関する研究がある⁵。これは、主に装束の製作技術および染色技術の観点から、マプーチェ領域の北部にあたるピオビオ州とマジェーコ州におけるマプーチェの機織り民芸の現状を考察したものであり、やはりスペイン人到来以降の変容という論点は含まれていない。

また、文化人類学者ペドロ・メヘは、マプーチェ女性が着用する帯「トラリウエ」に関する研究を1987年に発表している⁶が、この研究でもやはり現代のトラリウエに描かれた文様が持つ象徴的意味の考察に主眼が置かれ、通時的観点からの検討は行われていない。

それに対し、ダイナミックな視点を備えた研究として、文化人類学者のク

ロード・ジョゼフが1920年代後半に実施した現地調査に基づき、アラウカーノス(マプーチェ)の織物に関して発表した論文がある。この論文の冒頭部でジョゼフは、ペルーの先住民やスペイン人から紡績や機織りの技術がマプーチェに伝播したこと、また、征服当時、マプーチェが毛織物以外に動物の毛皮、鳥類の羽根、樹皮、そして植物の繊維で製作した装束の品々も着用していた旨を記している。一方、ペルーからの借用に関しては、ケチュア民族がチリに侵入した際(つまり15世紀の末)に、毛織り製のシャツ、ポンチョ、マント、帯、ハチマキの類をマプーチェの間に導入した旨を記述している⁷。

ジョゼフの研究は、1920年代当時のマプーチェの機織り技術に関する興味深いモノグラフであると同時に、征服期以降の変容の問題を視野に入れているという点では評価できる。しかしながら、以下のような二つの問題点を抱えている。

第一に、スペイン人の到来時、マプーチェたちが毛織物のほかに動物の毛皮や樹皮等で製作した装束を使用していた旨を指摘しているが、後述するように、同時代資料に含まれる情報は、この指摘を疑わせる。

第二に、ケチュア民族がチリに侵入した際、様々な装束の品を導入したという指摘についても、具体的な論拠を挙げていない。そして、本稿で検証するように、ポンチョ(貫頭衣)は、ジョゼフの指摘とは逆に、むしろマプーチェ起源の装束であると考えられる一方、帯やハチマキに関しても、これらの品が必ずしも「先スペイン期」に借用されたとは限らないという意味で、少なくとも議論の余地がある。

以上見たように、ジョゼフの研究も、装束の変容に関する複数の主張に関して、これを裏付けすべき具体的かつ実証的な論証を欠くという問題をはらんでいるといえる。

最後に、文化人類学者のアンヘリカ・ウィルソンが、1993年に出版されたチリの先住民の伝統民芸に関する研究に所載されたマプーチェの織物民芸に関する論文(「マプーチェの織物」)を見てみよう。

ウィルソンもこの論文の冒頭部で、スペイン人による征服期から19世紀にかけて、マプーチェの織物民芸の分野で発生した変化を論じている。

まず、征服期をマプーチェの織物民芸における発展プロセスの原点ととらえ、原料供給源としての「羊」の重要性やスペイン人女性捕虜の影響を特筆しているが、いずれも、ごく少数の同時代資料や後世の研究に依拠した、実証性の低い推論に終始している⁸。

次にウィルソンは、植民地時代を織物民芸の絶頂期ととらえ、植民地との交易における商品および婚資としての織物装束品の重要性を指摘しているが、それぞれの論点に関して、18世紀と17世紀に書かれた資料を1点挙げているだけで、やはり実証性は低い⁹。

また、19世紀に発生した変容の事例として、男性装束のヨーロッパ化に言及しているが、論拠として挙げているのは地区首長層に関する少数の事例に過ぎず、男性一般の装束の変容を示唆する情報は記述していない¹⁰。

そして最後に、女性装束については、その「変化が小規模」であったとした上で、「チャマル」(全身マント)の丈の変化、「イクージャ」(肩掛けマント)に関する毛織生地由市販生地による代替、ブラウスや綿布の導入等の変化を指摘している¹¹。

しかし、後述するように、そもそも「イクージャ」は中央アンデス地域の先住民装束に起源があり、異文化からの借用が明らかである。一方、「チャマル」に相当する装束がはじめて記録に現れるのは17世紀の前半、そして「チャマル」という名称が記されるのは18世紀のことであり、この品が女性用の装束として確立したのが、征服後かなり時間が経過した後のことであったと推定される。

このように、現代マプーチェ女性の伝統装束の中核をなすこの二つの品の存在そのものが、女性装束におけるダイナミックな変容を物語っているにも関わらず、ウィルソンはこの点を論じていない。そして、これら二つの装束品と密接に関連しつつ、やはり植民地時代に中央アンデス地域から借用されたと思われる留め金「トゥプ」(後述)にも言及していない。

つまり、ウィルソンの研究は、征服以降の時期におけるマプーチェ装束の変容に関して、複数の主張を展開しているものの、論拠が不十分であり、恣意的な推論が多く含まれているといえる。

以上から、マプーチェの歴史や文化に関する従来の研究では、装束の問題に関して、征服期以降の「変容」のテーマが軽視され、動態的な視点を含んだ研究の場合も、少数の資料に基いた恣意的な推論が多く、実証性に欠けるものが多いといえる。

2. 本稿の内容と意義

従来の研究に観察される以上の問題点に鑑み、本稿では、植民地時代の初

中期に先住民マプーチェの装束の分野で発生した変容を論じる。具体的には、スペイン人が到来した16世紀の半ばから、長大な闘争と自立的なテリトリーの回復を経て、両社会の関係が平和的なものへと転換する過渡期にあたる17世紀までの時期に絞り、同時期における先住民装束の変容を、同時代の文献資料に依拠しつつ、実証的に検討する。

本稿を執筆する意義は二つあると考える。第一に、学術的な観点から見て、マプーチェの「伝統的装束」と称されるものがいつ、どのように形成されたのかを知ることは、現代のマプーチェの装束が有する社会的・象徴的な意味を歴史的コンテクストに位置づけて理解するために重要な作業であろう。また第二に、この時期の先住民着衣における変容を、異民族の圧力に対して地元住民が行った適応の事例ととらえると、実践的な観点からの示唆も少なくない。

なお本稿では、考察の対象を、通常に着衣するタイプの「実用的な装束」に限定する。これ以外に、儀礼時の装束や装飾品、そして権威の象徴としての造形物(斧や杖など)等も興味深い対象だが、これらの品々に関する考察は別稿に譲りたい。また、18世紀にも興味深い変化が発生しているが、この時期の装束に関しても稿を改めて論じたい。

第1章：征服期の装束

まず、スペイン人たちがマプーチェの居住領域にはじめて到来した1550年代に、征服のプロセスに参加した軍人や兵士が書き残した記録から、当時の先住民の装束に関する情報を見てみよう。

こんにちのチリ中北部を制圧したのち、南下してマプーチェ居住領域の征服に着手したペドロ・デ・バルディビアは、1551年に皇帝カルロス5世へ宛てて綴った手紙の中で、当時マプーチェのテリトリーにはラクダ科の動物チリウエケ(リヤマ)が多数生息していたこと¹²、そしてマプーチェたちがチリウエケの毛を使い、装束の品々を製作していた旨を指摘している¹³。また、バルディビアに随伴して初期の征服事業に参加したマリーニョ・デ・ロベラーも、多数のチリウエケの存在に言及している¹⁴。

次に、やはり複数の記録者が、征服期当時、先住民たちが身に付けていた装束の品々に言及している。

まず、バルディビアに随伴して征服初期のチリ(1558年まで)を見聞した

ヘロニモ・デ・ビバルは当時先住民たちが身に付けていた品として、「脚の間に巻き付けて先端を腰のところで留める」下半身用の「マント *manta*」、腿半分までのもの、より短いものなど、多様なタイプのものがある上半身用の「シャツ *camisetas*」、そして「外套」タイプの「マント *manta*」の三点を挙げ、下半身用マントのみを着用する場合など、各人の可能性に応じて、多様な着衣のスタイルが存在するという旨を付け加えている¹⁵。

また、同時代のもう一人の軍人の記録者ゴンゴラ・デ・マルモレホは、「袖なしのシャツ *camisas sin mangas*」のほか、一部のものが使用していたという「幅広ズボン *zaragüeles*」に言及している¹⁶。

一方、1557年から58年にかけてチリの総督を務めたウルタード・デ・メンドーサがチリ南部を訪歴した時の次第を扱った記録（以下「訪歴」と略）には、マプーチェ領域の南部にあたるチロエ群島対岸部に居住する先住民の装束に関して、毛で作る一種のモゼタ（短かいケープ）、その下に着るシャツ（*camiseta*）、同じ毛糸製のフード、ズボンの四点が記されている¹⁷。

このうち、上着用の「シャツ」は全ての記録者が挙げているにも関わらず、具体的にどのようなものかに関する説明はない。もしこれが、今日のマプーチェ男性の伝統的装束の中核をなす貫頭衣（マクン）であったとすると、当時のヨーロッパでは知られていなかった品であったことになり、17世紀以降の多くの記録者たちがそうした（後述）ように、その形状（四角形）や着用法（中央の穴から頭を通す）を説明するのが自然であろう。その証拠に、例えばビバルは、脚に巻きつけるタイプのマント（以下「脚巻きマント」）に関しては、着用法を具体的に示している。しかし上着に関しては、ゴンゴラ・デ・マルモレホが付した「袖なし」という修飾句を除き、具体的な説明は記されていないのである。

このことから、これは貫頭衣タイプのものではなく、当時のヨーロッパ人にとって珍しくない「通常のシャツ」、あるいはそれに近い形状のものであったのではないかと判断される。換言すれば、ポンチョ（貫頭衣、マクン）が先スペイン期から存在したことを前提とする通説とは異なり、スペイン人の到来時には貫頭衣タイプの着衣は存在しなかったか、少なくとも広く普及してはおらず、これを着用する習慣がマプーチェの間で確立したのは、征服以降の時期であった可能性が高いといえる。

次に、下半身用装束について、マルモレホはこれを「幅広ズボン *zaragüeles*」と記している。またビバルも、「脚に巻き付け」て装着するというマントを、

やはり「幅広ズボン *zaragüeles*」と表現している。とすれば、マルモレホのいう「幅広ズボン」も「脚巻きズボン」を指している可能性が高いと判断される。この「脚巻きズボン」は、19世紀末の「平定」期頃まで、一部の地域で男性が着用していた下半身用の装束「チリパ *chiripá*」を連想させるが、次節で見るように、このタイプの巻きズボンは、17世紀には他のタイプのズボンによって代替されることになる。

一方、ビバルが挙げた「外套風のマント」に関して、マルモレホは挙げていないが、「訪歴」の記録者は、「短いケープ」を意味する「モゼタ *moceta*」という言葉を使って表現している。

最後に、「訪歴」には、これ以外に「フード」も記されているが、この記述がマプーチェ領域の中でも寒冷的な南部地域に関するものであることから、このタイプの品の使用は局地的な習慣であった可能性が高い。

なお、女性が用いていた耳飾り等の装飾品¹⁸を別とすれば、いずれの記録にも男性の装束と女性の装束を区別するような情報は見られない。ゆえに、当時、外部者の目を引くような男女間の装束上の差異は存在しなかったものと考えられる。

以上から、スペイン人が到来した当時、マプーチェたちがチリウエケ（リヤマ）から得た毛を使って製作し、身に付けていた主な装束品は、上半身用の「シャツ」、下半身用の「脚巻きズボン」、そして外套タイプのマントの三点であったといえる。

ここで、征服に続く時期における変容という観点から注目すべき点を三つ挙げておこう。

第一に、現代マプーチェ男性の伝統装束の中核を形成する貫頭衣「マクン」が、この時期には存在しなかった（あるいは、少なくとも、普及してはいなかった）ことが挙げられる。

第二に、こんにちマプーチェ女性の典型的な装束の品と認識されている外套「チャマル」に通じるようなマントの類が、当時から使用されていたものの、その種類や用途に関して男女を区別するような情報は記されていない。後述するように、17世紀の前半の複数の記録に「男性用のマント」に関する記述がある。とすれば、スペイン人が到来した16世紀半ば当時にも、マプーチェ女性のみならず、男性たちもマントの類を身に付けていた可能性が高い。

要するに、現代マプーチェ男性の象徴である「マクン（貫頭衣）」は存在せず、逆に、現在では「女性性」のシンボルともいえるマントの類について

は、当時は男女を問わず着用されていた可能性が高いのである。

そして第三に、これらの点とも関連するが、いずれの記録者も、装飾品を除いて男女の装束を全く区別していない。

以上から、ジェンダー上の差異が顕著な現代マプーチェの装束とは対照的に、当時のマプーチェの装束には性差が不在であったか、あるいは、極めて微小なものであったと考えられる。換言すれば、今日のマプーチェ男性、およびマプーチェ女性を特徴付ける、それぞれ独自の個性を備えた装束のスタイルは、むしろヨーロッパ人到来以降の時期に確立されたという側面が強いと考えられる。

そこで次章では、征服期から17世紀にかけての時期に発生した変容を見てみよう。

第2章：17世紀の装束：装束におけるジェンダー差の発生と拡大

征服期の装束に関する前章での議論をふまえ、本章では17世紀に書かれた複数の一次資料を年代順に検討することにより、スペイン人が到来した16世紀の半ばから1世紀半の間に、マプーチェの装束の分野で発生した変化を検討する。

1. 男性用の貫頭衣「マクン」と女性用のマント「イクージャ」

まず、17世紀前半のマプーチェの装束に関する情報を含む、二つの資料を見てみよう。

スペイン人征服者たちに一旦は屈したものの、水平的な社会構造を特徴とするマプーチェは、異民族による支配を嫌い、1553年に征服者バルディビアの殺害に成功したのち、長期にわたって断続的に反抗を展開した。その過程で彼らは、スペイン人がもたらした馬や鉄といった要素を積極的に取り入れ、軍事力を飛躍的に拡張させる¹⁹。そして、1598年のクララバの地におけるチリ総督軍の壊滅を契機に、1598年から1604年にかけて燃え広がった一斉蜂起によって、ビオビオ川以南に建設されていた都市や要塞を破壊すると、同地域におけるスペイン人の支配を実質的に消失させてしまう。

このように、マプーチェの社会が軍事面で大きな変容を遂げながら、事実上の独立を回復した17世紀初頭のチリ南部に身を置き、和平実現のために奔

走した人物に、イエズス会のルイス・バルディビア神父がいる²⁰。まず、バルディビア神父が執筆し、1606年にリマで出版された「チリ語（マプーチェ語）の語彙集」（以下「語彙集」）を見てみよう。

この語彙集には、17世紀の初頭に先住民が着用していた装束品のマプーチェ語による名称が、スペイン語での説明とともに記載されている。

ここで興味を引くのは、いくつかのアイテムに関して、その用途がジェンダーを区別する形で説明されていることである。

まず、男性用の装束としては、「男性インディオのシャツ」というスペイン語訳とともに、「マクン Macuñ」という名称が挙げられている²¹。形状に関する説明は記されていないが、後述するように、これは17世紀中葉以降数多くの記録に、男性用の「貫頭衣」を指す名称として登場する言葉であり、現在まで同じ名称が用いられている。

そして、もう一つ男性用の装束として記載されているのが、「チョーニェ Choñe」というマントである。征服期のビバルの記録や「歴訪」では、「外套タイプのマント」が男女の区別なしに記述されていたが、この語彙集では、より具体的に「男性用のマント」の存在が示唆されていることは興味深い。こんにち、マプーチェの男性がマントの類を着用することはないからである。

以上、男性用装束として記載されている二つの名称（マクン、チョーニェ）は、いずれもマプーチェ語を起源とする名称で、しかも非合成語である。したがって、これらの装束そのものもマプーチェ起源である可能性が高い。

他方、バルディビア神父は、「インディオ女性のマント」という説明とともに「イクジャ Yclla」という名称を記載している²²。このマント（「イクージャ」）はこんにち、マプーチェ女性の伝統装束の主要な一角を形成する品と認識されているが、以下見るように、これはアンデス地域から伝播したものであった考えられる。

やはりイエズス会士であったゴンサレス・オルギン神父が編集し、1608年にリマで出版されたキチュア（ケチュア）語の語彙集がある。いわゆる「インカ帝国」の公用語で、植民地時代にもアンデス地域の共通語（*lengua general*）として広く使われていたこの言語（キチュア語、ケチュア語）の単語を集めたこの語彙集には、「女性のマント」を意味する「ジクジャ Lliclla」という言葉が、この名詞から派生した二種類の複合動詞、すなわち「ジクジャを着用する」（*Lliclla llicuni*）という再帰動詞、「ジクジャを着用させる」（*Lliclla llichini*）という他動詞とともに掲載されている²³。

また、やはりペルーの先住民ワマン・ポーマが、16世紀の末から17世紀初頭にかけての時期に同地域における植民地支配の実態を綴った記録にも、「ジクジャ (lliclla)」という言葉がおびただしい数の箇所に記載され、このマントを着用した多様な身分の女性の姿が挿絵に描かれている²⁴。

そして今日でもペルーやボリビアでは、肩掛けマント「ジフジャ llijlla」(「ジクジャ lliclla」)は、先住民女性にとって必須の装束品として広く使われている²⁵。

以上から、バルディビア神父が「語彙集」に掲載した「イクジャ」は、形態・名称²⁶の両面から考えて、アンデス地域の先住民女性たちが古くから愛用してきたマント「ジクジャ」を起源とすると考えてほぼ間違いない。

ただ、このマントがアンデス地域からマプーチェの間に伝播した時期ははっきりしない。先述のように、外套型のマントはビバルの記録や「歴訪記」にも記されていたことから、すでに先スペイン期にこのタイプの装束がマプーチェ社会に伝播していた可能性もある。また、征服以降の時期に、スペイン人がアンデス地域より導入したヤナコーナ(私的奉仕を行う先住民)たちから、マプーチェに伝わったという可能性も考えられる。

なお、アンデス地域の場合、「ジクジャ」は留め具の「トポ」(後述)と組み合わせて使用されるのが常であるのに対し、「語彙集」にこの留め具は記載されていない。したがって、この時期にはマントだけが借用されていた可能性がある。

いずれにせよ、今日のマプーチェ女性たちが用いる伝統的な装束スタイルの中核の一つを形成する「イクージャ」がマプーチェ起源ではなく、アンデス地域から借用された品であることは興味深い事実である。

そして最後に、バルディビア神父は、「トラリウエ」という「帯」、そして「トラリ・ロンコ」という「ハチマキ」の二点も記載しているが、これらの品については男女による用途を区別してはいない。この二点の名称はマプーチェ語だが、いずれも合成語である(「トラリウエ」の原義は「締めるもの」、「トラリ・ロンコ」の原義は「頭に締めるもの」)ことから、これらの品そのものは他地域(例えばアンデス地域)から借用された可能性もある。

次に、同じくイエズス会士であるオバージェ神父が、1645年にローマで出版したチリ王国に関する記録を見てみよう。1603年にサンティアゴで生まれ、1618年にイエズス会に入信したオバージェが、のち1641年チリ初代の代理人としてスペインに派遣され、46年にローマで出版したのがこの記録である。

17世紀前半のチリ王国の状況を反映していると考えられるこの記録でも、先住民の装束は男性用と女性用を区別して説明されている。

まずオバージェが男性用の装束として挙げるのは、膝まで達する開放式のズボン、一片の長さ1.5パラ(約120cm)の四角形で、「中央の穴から頭を通して」着用する「マクン macuñ」、マクンの上から腰の位置で締める帯またはヒモ、外出時に着用するマント「チョーニ choñi」、そして様々な色彩の鉢巻である²⁷。

この中で特筆すべき点の一つは、すでに「語彙集」に掲載されていた「マクン」が、貫頭タイプの装束であることが明示されていることである。とすれば「語彙集」の「マクン」も貫頭衣を指していた可能性が高く、遅くとも17世紀初頭には、すでにこのタイプの装束がマプーチェ男性の間で広く使われていた、つまり、征服初期の時期に使われていた「(袖なし) シャツ」が、この時期までに貫頭衣「マクン」に代替されていたと考えられる。

それでは、こうした変化がなぜ起こったのだろうか。「マクン」の出現あるいは普及を促進した社会的背景として、スペイン人の到来以後、マプーチェたちが征服者に対する抵抗を持続する過程で経験した軍事的側面におけるある変容、すなわち「馬」の同化に言及する必要がある。

征服当時、馬は新大陸には存在せず、スペイン人たちにとって先住民の征服に寄与する重要な軍事要素を構成していた。この事実を認識したマプーチェは、長期にわたって抵抗を展開する過程で、敵方の強力な武器であった「馬」を積極的に同化し、遅くとも1570年代の後半には自らの騎馬隊を征服者との戦闘に投入するに至った²⁸。歩兵であったマプーチェの男たちが騎馬兵に変身したのである。

オバージェは、同じ記録の中で、先住民の騎馬戦士たちが有する高い可動性を特筆し、これを可能にする要素の一つとして、彼らの「装束の簡素さ」を特筆している²⁹。また、17世紀の後半に書かれたロサレスやキログの記録(後述)には、乗馬時に着用するマクンが、宿営時の寝具としてもそのまま用いられる旨が記されている³⁰。そして、おそくとも18世紀には、その形状から乗馬に適し、雨露をしのぐためにも優れているという理由で、先住民起源のこの貫頭衣が、チリやペルーをはじめとする南米のヨーロッパ系住民の間でも広く普及していた³¹。

筆者は別稿で、軍事面における変容が「食」の分野に与えた影響を論じ、騎馬兵に変容したマプーチェ男性の間で、軽装性を重視する独自の戦闘スタ

イルに適合した戦時食（ウルポ）が広く普及した事実を指摘した³²。とすれば、着衣の面でも同様に、乗馬に適し、野外での宿営にも使える貫頭衣が新たに考案され、広く使われるようになったとしても不自然ではない。

以上から、こんにちマプーチェ男性の代表的な装束品と認識されている貫頭衣「マクン」は、スペイン人の到来以降の時期（16世紀の後半）に、征服者に対する抵抗を展開する過程でマプーチェたちが生み出した独自の装束であった可能性が高いといえる。「マクン macuñ (makuñ)」という名称がマプーチェ語起源の非合成語であることも、この可能性を支持する事実である。あるいは一步譲って、この品が征服期の記録には記述されていなくとも以前から存在したと仮定しても、少なくともその使用が一般化したのは征服以降の時期であったと考えられる。

つまり、貫頭衣「マクン」はもともと、「敵対的な社会集団に対する抵抗」という現実的な必要性を前にして、マプーチェ男性たちが生み出した、あるいは確立した、実用性の高い新しいタイプの着衣の品であったといえる。

次に、「語彙集」に載っていなかった唯一の品である「ズボン」も興味をひく。征服期の記録者ビバルは、下半身用装束として「脚巻き式のマント」を挙げていたが、オバージェ神父の挙げた「ズボン」は「開放式で体に密着しない *abierto y suelto*」と説明されており、形状や装着法の異なる新しいタイプの着衣であると考えられる。この変化にも、馬上での使用という要因が影響した可能性が考えられる。

そして、バルディビア神父の語彙集では、男女の別なく記されていた「ハチマキ」を、オバージェは「男性用の装束」として記述していることも興味深い。

なお、以上見た貫頭衣、ズボン、ハチマキの三点は男性専用の品として記されている。

その一方で、「語彙集」にも記載されていた男性用マント「チョーニ」と、貫頭衣の上から締める「帯」の存在も興味を引く。今日、マントと帯（トラリウエ）は、女性の正装を構成する品として、もっぱら女性たちが着用するものであり、男性がこれらの装束を用いることはない。しかし、バルディビア神父の語彙集でも、男性用マントとして「チョーニエ」が、そして性別を区別しない形で「トラリウエ（帯）」が掲載されていたことから、少なくとも17世紀初めから半ばにかけての時期には、男性たちもこの二つの品を使用していたと考えられる。

次にオバージェは、先住民女性の服装に言及し、屋内用の装束としては、「首から足元までの全身を覆う」マント、このマントを肩部で固定するための一對の留め金「トポ Topo」、マントの上に幾重にも巻いて腰から胸までを覆う「帯」の三点を、そして外出時にこれらに加えて用いる品として、肩に羽織り、やはり「トポ」を用いて胸前で固定する四角形の半マント「ジフジャ lliqlla」を挙げている³³。

このうち、肩掛けマントの「ジフジャ (イクージャ)」については、これがアンデス地域から伝播したことをすでに指摘した。また「帯」も、すでにバルディビア神父の語彙集に掲載されていたことを見た。

それに対し、「トポ」と「全身マント」の二点は、征服期の記録にも語彙集にも記されていない品である。

この「トポ」というのは、もともとアンデス地域の先住民女性が、肩掛けマント(ジフジャ)用を固定するために、金・銀・その他の金属で作っていた留め具で、先述のキチュア語語彙集(1608年)にも、「トゥプ tupu」の名称で掲載されている³⁴。(図1～4参照)

また、ワマン・ボマの記録にも、異なる身分の先住民女性たちに関する描写の中で、「トポ」という表現とともに、肩掛けマントをこの留め具で固定した様々な身分の女性の姿が挿絵に描かれている³⁵。また今日でも、この「トゥプ」は、ペルーやボリビアの先住民女性の間で、マントの留め具として使用されている³⁶。

要するに、「トポ」も、すでに見た「イクージャ」と同様、アンデス地域からマプーチェ女性たちが借用した品であることがわかる。

ただし、この留め具に関しては、情報征服期の記録にも先述のバルディビア神父の語彙集にも記されていないことから、「イクージャ」の導入よりも後の時期、具体的には、17世紀前半のある時点でマプーチェの間に伝播・普及した可能性が高いと思われる。

他方、女性たちが直肌に着るという全身用のマントについて、オバージェはその名称を記していないが、装着法(全身用)や用途(室内でも着用)から考えて、18世紀後半以降、数多くの記録に記されることになる「チャマル chamall」のことであると判断される³⁷。

いずれにせよ、オバージェの記述から、のちにマプーチェ女性の正装となる「肩掛けマント、全身マント、帯、留め金」という四点セットのスタイルが、17世紀前半の段階で出現していたこと、そしてそのうち少なくとも二点

(イクージャ、トボ)はマプーチェ起源ではなく、アンデス地域から借用されたものであったといえる。

以上のオーバージェの記述から、次のことが指摘できる。17世紀の半ば当時、貫頭衣、ズボン、ハチマキの三点が男性専用の装束として用いられる一方、女性たちの間でも、今日の伝統的女性装束に通じる「マント」や「帯」を中核とするスタイルがすでに出現していた。ただし、男たちはこの時期、女性と同じように「肩掛けマント」や「帯」をも併用していた。以上である。

つまり、男女間の装束上の差異が不在または微小であった征服期とは異なり、ジェンダーによる差別化がある程度発生していたものの、その差異は未だ限定的なものであったといえる。

2. ジェンダー的差異の拡大

この節では、17世紀の後半におけるマプーチェの装束と、そのジェンダー的差異の拡大について検討する。

まず、スペイン生で生まれ、17世紀の中葉から第三四半世紀にかけてチリに滞在し、マプーチェの改宗と和平に尽力する過程で、先住民の習俗をつぶさに観察したイエズス会のロサレス神父が、1674年に執筆を完了したチリ王国に関する記録を見てみよう。17世紀の第三四半世紀の状況を反映するこの記録の中で、ロサレスは、先住民の装束をやはり男女を区別して説明している。

まず男性の装束に関しては、四角形の貫頭衣と開放式ズボンの二種類を挙げ、外套の類は使用しない旨を指摘した上で、ヒモ型の鉢巻きにも言及している³⁸。

一方ロサレスは、バルディビア神父やオーバージェ神父が男性用装束として挙げていたマントの「チョーニ」や、性別による用途上の差異を記さなかった「帯」は挙げてはいない。また、17世紀の末や18世紀に執筆された複数の記録にも、この二点は男性用装束には含まれていない³⁹。ここから、すでに17世紀の後半の段階で、男たちはこれらの装束品を着用しなくなっていたと考えられる。この変化にも、乗馬時の便宜という実践的要因が影響した可能性も考えられる。

一方、女性の装束についてロサレスは、「開放型のズボン」を使わないこと以外は男性の装束と同様である旨を指摘した上で、「男性用と同様」の貫頭衣、胴の部分（腰から膝まで）に締めるマントのほか、祭礼時に肩の上に羽織り、胸のところでピンで留めるマント「ジュージャ lliella」を挙げている⁴⁰。

これらの品々のうち「胴に締めるマント」というのは、オバージェのいう「帯」のことであろう。また肩掛けマント「ジェージャ」は、機能および名称から、先述したアンデス起源の「イクージャ」のことであると判断できる。

それに対し、ロサレス神父が女性用着衣の中に「貫頭衣」を含めている点は、「マクン」を男性用の装束として挙げたバルディビア神父の記述や、「全身マント」を女性の主要な装束とするオバージェ神父の記述とは異なっている。また、17世紀以降に書かれた多くの記録の中で、マプーチェ女性によるマクンの着用言及しているのは、このロサレスの記録のみである。

とすれば、この差異の理由として二つの可能性が考えられる。一つは、「女性のマクン着用」に関するロサレスの情報が誤りである可能性、もう一つは、当時、一時的に女性が貫頭衣を着用するという習慣が実際に存在したという可能性である。

ロサレスは、複数の先住民地区で長年にわたって布教活動に従事し、和平交渉にも積極的に参加する過程で、彼らの習慣を熟知するに至った人物であり、このように根本的な事柄について誤った記述をすること、すなわち第1の可能性は考えにくい。とすれば、この記述は次のような状況を示唆しているのではないだろうか。

すなわち、もともと男性用装束として使われ始めた貫頭衣「マクン」だが、17世紀中葉の時期には、少なくとも地域レベル、あるいは個人レベルで、実際にこれを着用する女性たちがいたという可能性である。

先述した一斉蜂起と先住民による自立的テリトリーの回復に続く17世紀中葉の時期は、植民地当局がマプーチェたちの居住領域に対する（再）征服の意図を未だ保持し、また実際に、同領域に対する攻撃が毎年のように行われ、しばしば捕虜となった先住民が奴隷として売却されていた時期であった⁴¹。とすれば、緊急時に女性が乗馬して移動したり、露営したりすることも珍しくなかったはずで、そうした事情が女性のマクン着用を促していたという可能性も考えられる。

しかしながら、1641年に開催された全域的な和平交渉「キジンの和平」や1683年における先住民奴隷制の廃止を契機としつつ、17世紀の後半から18世紀にかけて、両社会の関係は次第に敵対的なものから平和的なものへと変容していった⁴²。

おそらくこうした軍事・政治的コンテキストの変化を一因として、18世紀以降の記録には女性による貫頭衣使用に関する記述は一切見られなくなり、

貫頭衣は完全に男性専用の装束として定着することになる。

そして最後に、17世紀中葉から18世紀初頭（1644～1704年）にかけて、植民地軍の軍人として任務に当たったヘロニモ・デ・キロガが、1700年までのチリの軍事状況に関して著した報告書（1690年執筆）を見てみよう。

この記録中でキロガは、当時（16世紀末）マプーチェたちが用いていた装束として「開放式のズボン」と一対の「貫頭衣」を挙げる一方で、シャツや帯の類は使用しない旨を記した上で、着脱の容易な貫頭衣が、屋外でも瞬時のうちに寝具に変わる点を特筆している⁴³。なお、ロサレスの記録同様、「マント」の類は記されていない。

キロガの記録は軍事的性格が濃厚な報告書であることから、この説明は男性用の装束に言及したものであると判断される。

以上検討したロサレスとキロガの記録に含まれた情報から、17世紀の後半にマプーチェたちの装束の分野で発生した変化を次のようにまとめることができる。

まず、男たちは17世紀前半には着用していた外套風のマント「チョーニエ（チョーニ）」や「帯」を脱ぎ捨て、これら二つの品は女性専用の装束として定着した。こうして、貫頭衣マクンを中心とする男性の装束スタイル、マント類を中心とする女性の装束スタイルとがそれぞれより明確となり、その結果、装束におけるジェンダー的な差異がさらに拡大した。

なお、女性に関しては、「全身用マント」で身を包み、胴部には帯を締め、肩には半マント「イクージャ」を羽織り、これらのマント類を留め金「トポ」で留めるというスタイルが、すでに17世紀前半には出現していたことはすでにみた。未だ戦闘的な状況が続く中で、一時期、女性たちも男性と同様の貫頭衣を使用していた可能性があるものの、遅くとも18世紀には、この4点セットが女性用装束の定番として完全に確立し、現在に至ることになる⁴⁴。

こうした装束の性別による差異の発生や拡大は、マプーチェ社会におけるいかなる変化と関係しているのだろうか。男性の騎馬戦士への変身が実践的な装束スタイルの確立を促進した、という点を除いて、本稿でこの問題を論じることばできなかったが、以下のことを示唆しておこう。

異民族征服者との長期にわたる対峙という状況の中で、マプーチェ社会の中では「戦事」を最優先事項とする共通の認識が確立されていった。とすれば、最も重要な活動である戦闘の直接の担い手である成人男性と、これを側面から支える女性という性別による役割の分担が、この時期に明確化したで

あろうことは想像にかたくない。そして、こうした社会的変容が、同時期における装束上のジェンダー的差異の発生や確立に影響を及ぼしたと思われる。

結 論

スペイン人が到来した16世紀半ば当時、チリの先住民マプーチェたちはチリウエケ（リヤマ）の毛を使い、袖なしのシャツ、脚巻きズボン、肩掛けタイプのマントといった装束品を製作し、着用していた。そして、男女の装束上の差異はほとんど存在しなかった。

しかし、16世紀の半ばにスペイン人征服者が到来したのち、16世紀の後半から17世紀にかけて、彼らの装束は大きく変容した。

まず、征服者に対する闘争の過程で歩兵から騎馬戦士に変身した先住民の男たちは、マント（チョーニ）を脱ぎ捨て、シャツの代わりに実践性に優れた独自の貫頭衣「マクン」、そして「脚巻きマント」の代わりに「開放型のズボン」を身にまとい、頭にはハチマキを締めるというスタイルを確立した。

一方、女性たちの間では、長丈のマントに身を包み、胴部に帯を締め、肩には中央アンデスの先住民から借用したマント「イクージャ」を羽織り、同地域から借用した留め金「トゥボ」でこれを留めるという4点セットのスタイルが出現した。17世紀の中葉には、男性と同様、貫頭衣を着用することもあったと思われるが、のち18世紀にはこのスタイルがマプーチェ女性装束の定番として確立し、今日に至ることになる。

このように、それぞれ独特の装束スタイルが発展した結果、先スペイン期にはほぼ皆無であった男女の装束の間に差異が発生し、拡大した。このような装束におけるジェンダー的差異の拡大は、同時期にマプーチェ社会が経験した軍事化（戦事優先化）とそれに伴う男女の社会的役割の相対的变化のプロセスと関係があると思われる。

この点に関し、本稿では、戦闘スタイルの変化（歩兵から騎馬兵へ）の男性装束への影響という側面を除き、具体的に議論することはできなかった。この時期のマプーチェ社会における男女の役割の変化とその装束への影響、アンデス起源の女性用装束品の導入の時期とその理由、あるいはその象徴的意味といった問題については、稿を改めて論じることとしたい。

ただ、少なくとも、従来の研究では、静態的な視点から固定的なイメージが形成されていたマプーチェのいわゆる「伝統装束」について、先スペイン

期のそれが、今日「伝統的」とされる装束のスタイルとは大きく異なるものであったこと、そして男女それぞれの「伝統装束」が、征服以降の時期にダイナミックに変容した結果、新しく確立されたものであるという性格が強いことを示唆したという意味で、ささやかな一石を投じることはできたのではないかと考える。

注

1. この時期における両社会の交流に関する研究としては、Villaobos y otros (1982). Villalobos, (1989). León (1991). Villalobos (1995) を参照。
2. Guevara, II, pp.262-271.
3. Medina, pp.168-172.
4. Zapater (1978), pp.54-55.
5. Balassa H. y otros.
6. Mege.
7. Joseph, p.5.
8. Wilson, pp.95-96.
9. Wilson, p.96.
10. Wilson, pp.96-97.
11. Wilson, p.96.
12. Pedro de Valdivia, p.153.
13. Pedro de Valdivia, p.172.
14. Lobera, p.309.
15. Vivar, p.266.
16. Marmolejo, p.72.
17. “Viaje de D. García Hurtado de Mendoza al sur de Vaidivia y fundación de Osorno”, p.222.
18. Vivar, p.266, p.274. Lobera, p.63.
19. 千葉 (1998年)、10-115頁参照。
20. パルディビア神父による和平の試みについては、Zapater (1989) 参考。
21. Luys de Valdivia.
22. Luys de Valdivia.
23. González Holguín, p.213.

24. Poma de Ayala, p.112, p.116, p.117, p.118, p.119, p.120, p.121, p.123, p.124, p.125, p.126, p.127, p.128, p.129, p.130, p.131, p.132, p.133, p.134, p.135, p.136, p.137, p.173, p.175, p.217, p.297. p.815, p.817, p.947, p.939, p.941, p.943.
25. Jesús Lara, 1991, p.130. Antonio Cusihamán G., 1976, p.81.
26. 以下見るように、17世紀前半の記録者オバージェ、17世紀中葉の記録者ロサレスは、同じ品を、ケチュア語により近い「ジフジャ lliqla」、「ジェージャ lliella」という表現でそれぞれ記している。(Ovalle, p.91. Rosales, I, p.152.)
27. Ovalle, p.91.
28. マプーチェによる軍事的目的での馬の同化については、千葉 (1998年): 62-69頁を参照。
29. Ovalle, p.88.
30. Rosales, p.153. Quiroga, p.26.
31. 18世紀のヨーロッパ系住民による貫頭衣の愛好については、Molina (1901), p.145. Vidaurre, pp.343-344. Pérez García, p.60.参照。
32. 千葉 (2006年)、149-153頁。
33. Ovalle, p.92.
34. González Holguín, p.347.
35. Poma de Ayala, p.112, p.116, p.125, p.173, p.175, p.217, p.288, p.297. p.815, p.817, p.939, p.943, p.947, p.1180, p.1194.
36. Jesús Lara, p.240. Antonio Cusihamán G., p.148.
37. Molina, p.148. Vidaurre, pp.343-344. Sors, p.181. Carvalho y Goyeneche, p.136.
38. Rosales, I, pp.151-152.
39. Molina, p.147. Vidaurre, p.343. Carvalho y Goyeneche, p.136. Pérez García, pp.60-61.
40. Rosales, I, p.152.
41. 1654年から56年にかけての時期には、先住民奴隷の獲得を目的として行われた遠征を契機として、マプーチェ領域の南部を中心に大規模な反乱が発生している。
42. 外部社会とマプーチェ社会の間に発生した戦闘の規模に関する通時的変化については、Villaobos (1989) 参照。

43. Quiroga, p.26.
44. Molina, p.148. Vidaurre, pp.343-344. Sors, p.181. Carvalho y Goyeneche, p.136. 参照。

参考文献

Balassa H., Américo y otros, *Pre-Informe: Investigaciones Textiles Mapuches y Colorantes Naturales*, Instituto de Desarrollo Indígena, Consejo de Investigaciones Científicas, Universidad de Concepción, 1973.

Carvalho y Goyeneche, Vicente, “Descripción Histórico-Geográfico del Reino de Chile”, en *Colección de Historiadores de Chile y documentos relativos a la historia nacional*, Tomo X, Santiago de Chile, 1876, pp.5-209.

千葉泉、『馬に乗ったマプーチュの神々—チリ先住民文化の変遷—』、大阪外国語大学学術研究双書19、1998年。

千葉泉、「「ウルボ」と「ニューイン」：チリにおける先住民食文化の変容」、*Estudios Hispánicos* 30号、大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室、2006年、143-168頁。

Cusihuamán G., Antonio, *DICCIONARIO QUECHUA, CUZCO-COLLAO*, Ministerio de Educación-Instituto de Estudios Peruanos, Lima, 1976.

Gisbert, Teresa, Arze, Silvia y Cajías, Martha, *ARTE TEXTIL Y MUNDO ANDINO*, Gisbert y Cía, La Paz, 1987.

Gómez de Vidaurre, Felipe, *Historia geográfica, natural y civil del Reino de Chile*, Colección de Historiadores de Chile y documentos relativos a la historia nacional, Tomo I, Imprenta Ercilla, Santiago de Chile, 1889.

González Holguín, Diego, *Vocabulario de la lengua general de todo el Perú llamada Lengua Qquichua o del Inca*, Editorial de la Universidad, Lima, 1989.

Guevara, Tomás, *HISTORIA DE CHILE, CHILE PREHISPANICO*, Balcells & Co., tomo II, Santiago de Chile, 1929.

Joseph, H. Claude, “Los Tejidos Araucanos”, en *Vivienda Araucana*, Revista Universitaria, año 13, no.10, pp.3-55

Lara, Jesús, *DICCIONARIO: QHESHTWA-CASTELLANO, CASTELLANO-QHESHTWA, LOS AMIGOS DEL LIBRO*, La Paz-Cochabamba, 1991.

León Solís, Leonardo, *Maloqueros y conchavadores en Araucanía y las*

Pampas, 1700-1800, Ediciones Universidad de La Frontera, Temuco, 1991.

Lobera, Mariño de, “Crónica del reino de Chile”, en *Crónicas del reino de Chile*, Biblioteca de Autores Españoles, Tomo CXXXI, Madrid, 1960, pp. 227-562.

Medina, José Toribio, *Los aborígenes de Chile*, Fondo Histórico y Bibliográfico José Toribio Medina, Santiago de Chile, 1952.

Meje R., Pedro, “Los símbolos constrictores: una etnoestética de las fajas femeninas mapuches”, en *Boletín del Museo Chileno de Arte Precolombino*, No.2, 1987, pp.89-128.

Molina, Juan Ignacio, “Compendio de la historia natural de Chile: segunda parte”, en *Colección de Historiadores de Chile y documentos relativos a la historia nacional*, Tomo XXVI, Imprenta Elzeviriana, Santiago de Chile, 1901, pp.103-376.

Olivares, Miguel de, *Historia militar, civil y sagrada de lo acaecido en la conquista y pacificación del Reino de Chile*, Colección de Historiadores de Chile, tomo IV, Santiago de Chile, 1864.

Ovalle, Alonso de, *Histórica Relación del Reyno de Chile*, Roma, 1646.

Pérez García, José, *Historia de Chile*, tomo I, Historiadores de Chile y de documentos relativos a la historia nacional, Tomos XXII, Imprenta Elzeviriana, Santiago de Chile, 1900.

Poma de Ayala, Felipe Guamán, *Nueva crónica y buen gobierno*, Tomo A, Crónicas de América, historia 16, Madrid, 1987.

Quiroga, Jerónimo de, *Memorias de los sucesos de la Guerra de Chile*, Editorial Andrés Bello, Santiago de Chile, 1979.

Rosales, Diego de, *Historia General del Reino de Chile, Flandes Indiano*, Tomos I y II, Editorial Andrés Bello, Santiago de Chile, 1989.

Sors, Antonio, “Historia del Reino de Chile, situado en la América Meridional”, en *Revista Chilena de Historia y Geografía*, Año XI, Tomo XXXIX, 1921, Núm. 43, pp.163-199.

Valdivia, Pedro de, *Cartas de relación de la conquista de Chile*, Editorial Universitaria, 1986, Santiago de Chile, 3ª edición.

Valdivia, Luis de, *Vocabulario de la lengua de Chile compuesto por el Padre Luys de Valdivia de la Compañía de Iesus*, Lima, 1606.

“Viaje de D. García Hurtado de Mendoza al sur de Vaidivia y fundación de Osorno”, en Gay, Claudio, *Documentos sobre la Historia, la Estadística y la Geografía*, Tomo I, París, 1846, pp.221-225.

Villalobos, Sergio, *Vida fronteriza en la Araucanía, el mito de la guerra de Arauco*, Editorial Andrés Bello, Santiago de Chile, 1995.

Villalobos, Sergio, “Guerra y paz en la Araucanía: periodificación”, en Villalobos, Sergio y otros, *ARAUCANIA, Temas de Historia Fronteriza*, Ediciones Universidad de Temuco, Temuco, 1989, pp.7-30.

Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones Fronterizas en la Araucanía*, Ediciones Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1982, pp.175-221.

Vivar, Jerónimo de, *Crónica de los reinos de Chile*, Historia 16, Madrid, 1988.

Wilson Aedo, Angélica, “TEXTILERIA MAPUCHE”, en Valdés, Ximena y otros, *MEMORIA Y CULTURA: femenino y masculino en los oficios artesanales*, Centro de Estudios para el Desarrollo de la Mujer CEDEM, Fondo de Desarrollo de la Cultura y las Artes FONDEC, Ministerio de Educación, Santiago de Chile, 1993, pp.91-107, p.112.

Zapater, Horacio, *Aborígenes chilenos a través de cronistas y viajeros*, Editorial Andrés Bello, Santiago de Chile, 1978.

Zapater, Horacio, “Parlamentos de paz en la guerra de Arauco (1612-1626)”, en Villalobos, Sergio y otros, *ARAUCANIA, Temas de Historia Fronteriza*, Ediciones Universidad de Temuco, Temuco, 1989, pp.47-82.